

Ⅱ－２（５）棚田保全はどこに向かうのか？

吉田 国光

1. 棚田保全をめぐる動向

1990年代に農業の多面的機能が注目されるようになって以降、棚田は「みられる」対象ともなったⁱ。「みられる」対象となった棚田には、「ふるさと」や「原風景」（以下、「ふるさと」）といった冠が付与され、全国各地で地域振興政策や町おこしに利用され、様々な補助や助成の対象となっているⁱⁱ。ここで使用される「ふるさと」は「ナショナルなレベル」で「他人のふるさと（故郷）を、自らのふるさとと捉えるような感性から生起してくる」ものであるⁱⁱⁱ。「ふるさと」のようにラベルとなりうるものの価値は、何らかの社会集団や人工的共同体の、社会的結合や帰属意識を確立・象徴化していくなかで創られる^{iv}。

棚田などの農業生産空間に「ふるさと」のラベルが付与される際には、平野部に居住する都市住民の基準が多数派となり、そうした都市住民の基準によって新たな価値付けがなされている^v。そのなかで稲作は、近世以降、平野部での最も重要な生業の一つであり^{vi}、多くの都市住民にとって無条件にノスタルジックな感覚を与えるものとなっている。このようにして稲作を中心にした諸現象に「ふるさと」の冠が付与されるようになった。

こうしたなかで棚田は保全すべき「ふるさと」とみなされるようになり^{vii}、1990年代以降、「ふるさと」ラベリングされた棚田を保全する活動が全国的にみられるようになった^{viii}。棚田保全活動を統括する全国組織として、1995年に全国棚田連絡協議会、1999年に棚田学会が組織された。そして1999年、農林水産省（以下、農水省）により「日本の棚田百選」（以下、棚田百選）が、各地で実践される棚田の保全活動を促進する取り組みの一つとして創始された^{ix}。この目的は、中山間地域に広く分布する棚田が農業生産に加え、国土・環境の保全、「ふるさと」の形成、伝統・文化の継承などにおいて多面的な機能を有していることから、保全や整備活動を推進するものである^x。選定基準としては、「①営農の取り組みが健全であること、②棚田の維持管理が適切であること、③オーナー制度や特別栽培米の導入など地域活性化に熱心に取り組んでいること」が挙げられており、2009年現在、全国134地区が棚田百選に選定されている^{xi}。

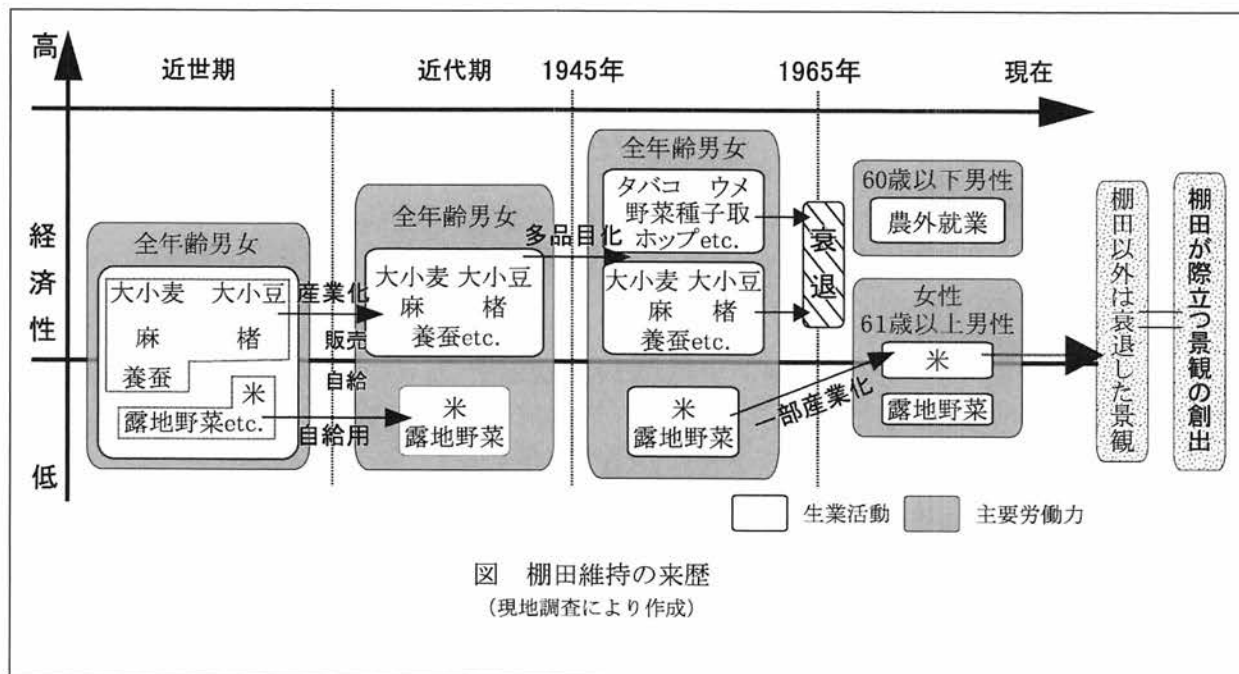
棚田百選の選定といった政策に呼応して、棚田保全活動の取り組みは全国的に増加していった^{xii}。保全活動の代表的な実践例として、棚田オーナー制の実施が挙げられる。棚田百選に選定されている千葉県鴨川市大山千枚田や三重県熊野市紀和町丸山地区、大阪府能勢町長谷地区では100口以上のオーナーがおり、大規模な保全活動が展開している。棚田オーナー制は、石川県輪島市白米地区においても活発であり、2009年時点では46口であるものの、現在ではさらに増加しているようである。これらの保全活動を概観すると、取り組みの中心は水稻作そのものを継続することに置かれているといえる。

一方、棚田の卓越する山村では、水稻作は歴史的に自給的性格の強いものであり、複合的に営まれる生業活動の一つにすぎなかった^{xiii}。山村における世帯収入の大半は、高度経済成長期以前には畑作や林業、養蚕、高度経済成長以降には土木業を中心とした農外就業から得られていた^{xiv}。すなわち、棚田は地域の生業形態を構成する要素の一つであり、棚田のみが独立して存立しているわけではない。これらのことから、棚田のみを取り出して様々な保全策を講じて一時的に耕作放棄地化が免れることがあっても、根本的な課題の解決に至らないことは容易に想像できる。まずは地域の生業形態のなかで棚田が維持されてきた仕組み、棚田での水稻作の役割を相対化する必要があるだろう。

2. ある「棚田百選」の事例

筆者はこうした関心から、棚田百選に選定されている長野県上水内郡中条村大西地区を事例に棚田が維持されてきた仕組みを、対象地域の複合的生業形態の歴史性をふまえ、個別農家の生業形態の変化や棚田オーナー制の実態を検討することから明らかにした^{xv}。そこで明らかになったことは以下に要約される。

①近世からの稲作の自給的性格の強さや小規模生産といった経営形態が、棚田での耕作の継続に寄与していた商業的性格を有し、大規模に展開していた畑作が衰退するなかで、経済的役割の低い稲作が自給的に継続されてきた（下図参照）。



②大西地区では、耕作放棄地や雑草の繁茂した畦畔などがみられ、「みられる」ことを前提にした棚田の保全活動は行われていなかった。大西地区の棚田は1枚あたりの面積が大きく、畦線も直線的で機械による農作業が可能であり、少ない労働力による耕作が可能であった。大西地区の耕作者は、個別世帯の生計維持を計っていくなかで棚田での耕作を継続していたために、棚田の保全活動の観点からは景観的に「美しい」とされない、1枚あたりの面積が大きい畦線の直線的な田を選択的に耕作していた。

③景観的に「美しい」とされる曲線的な畦畔を有する田の多くは、農業機械を入れることができず耕作放棄地となっていた。

④大西地区では農業従事者の高齢化が進み、他行政区の専業農家や近居する週末農民による借地経営が、離農世帯や転出世帯の跡地の継続的な利用に寄与していた。

⑤一部の農家で棚田オーナー制を実施することにより、米を高値で販売することが可能となり、専業的経営を可能にしていたが、「棚田の担い手確保」という役割は果たしていなかった。

以上のことから大西地区の棚田は、1990年代以降に展開してきた「みられる」ことを前提にした棚田

の維持とは、異なる文脈で維持されてきたといえる。メディア等でクローズアップされるような棚田の保全活動の存在は、棚田を維持する条件の一部となっていたが、自給的農業や週末農民、小規模な借地経営と並ぶ条件の一つにすぎなかった。

3. 「農村賛美」を越えるために

拙稿で得られた成果は、対象地域における稲作が存立してきた履歴を示したに過ぎない。しかし、棚田というだけで無批判・無前提に肯定し、その前景に内在する農業的課題を隠蔽して、棚田の有する「美しさ」や「伝統性」を盾にして棚田を維持する正当性を喧伝し^{vi}、目立った保全活動のみを取り上げ、そうした取り組みのみへの支援を促すようなことが、各種メディアや「有識者」と呼ばれる者によって強調されてきた状況を鑑みると、拙稿の成果はこれまで提示されてきた「問題」とされるものを相対化する意味があると考えられる。

むしろ、これまで取り上げられてきたような輪島市や鴨川市、千曲市などにおける棚田保全活動の事例は例外的存在であり、大西地区のようにその他多数の地区においては、現在も複合的生業のなかで水稲作が小規模で自給的に継続されていると考えられる。網羅的に確認したわけではないが、棚田百選に選定されている地区といえどもほとんどの地区は、輪島市などのような活況を呈する棚田保全活動とは一線を画しているように見受けられる。地域活性化を図るうえでは、棚田の利用を維持することは手段であって目的ではない。そこで棚田維持が不可欠なものであるとしたら、棚田保全活動と同様に、これまで捨象される傾向にあった自給的農業や週末農民、小規模な借地経営にも政策的な補助や支援の必要性があるといえよう。

ただし、都市住民の基準に沿って棚田を選択的に維持し続けると、従来の棚田とは全く異なるものへと変貌する可能性もある。これが各地に広がれば、一見すると「ふるさと」らしき棚田が至るところに存在することになるが、そのいずれも都市住民が共通して「美しい」と感ずるものに作り替えられ、地域の有する「個性」は相対的に低下するだろう。観光客の増加などを目論んで安易に取り組んだ保全策が、将来的には地域にとって「マイナス」となる可能性もある。輪島市白米地区では、2013年11月9日から2014年3月16日にかけて、棚田にイルミネーションを施した「輪島・白米千枚田あぜのきらめき」が実施されている。このイベントにより見物客は増加するだろうが、棚田耕作者の増加や棚田での水稲作の継続に寄与するのだろうか。注目を浴びることで外部者である見物客は増加し、そのなかで外部者が「棚田を保全しなければならない」と主張することはあっても、外部者が当事者となることは稀であろうし、外部者の求める「ふるさと」を演出することになるかもしれない。今後、棚田の保全を展開していくならば、目立った現象の「伝統性」を鼓舞したり、一過性の「盛り上がり」を求めたりするのではなく、地域全体もしくは地域間の連関のなかで、当該地域の棚田での水稲作が維持されてきた条件を捉えていく「伝統的」な地理学の視点も有用ではないだろうか。

ⁱ日本村落研究会編『消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」—』2005、農山漁村文化協会。

ⁱⁱ岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』2007、吉川弘文館。

ⁱⁱⁱ前掲2

^{iv}1) ホブズボウム,E・レンジャー,T.(前川啓治,梶原景昭他訳)『創られた伝統』1992,紀伊国屋書店。(2)

太田好信『トランスポジションの思想』1998,世界思想社。

^v岡橋秀典「ルーラル・デザインの展開と農村景觀論」地理科学 48, 1993, 255-268 頁。

-
- vi (1)白水 智『知られざる日本-山村の語る歴史世界-』2005, 日本放送出版協会。(2)溝口常俊『日本近世・近代の畑作地域史研究』2002, 名古屋大学出版会。
- vii菊地 暁「コスメティック・アグリカルチャリズムー石川県輪島市「白米の千枚田」の場合」(岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』2007, 吉川弘文館) 86-104 頁。
- viii (1)中島峰広「棚田の保全」地学雑誌 105, 1996, 547-568 頁。(2)中島峰広「山村におけるオーナー制度による棚田保全」地理科学 58, 2003, 179-187 頁。(3)中島峰広「棚田保全の潮流」環境情報科学 35, 2006, 30-35 頁。
- ix中島峰広『日本の棚田』1999, 古今書院。
- *社団法人農村環境整備センター「日本の棚田百選」(URL: <http://www.acres.or.jp/> 2013年12月18日検索)
- xi 前掲 10
- xii 前掲 8
- xiii米家泰作「山村概念の歴史性ーその視点と表象をめぐってー」民衆史研究 69, 2005, 3-20 頁。
- xiv (1)高野岳彦「養蚕・工芸作物の衰退と阿武隈中山間地域農業の地域的変容」季刊地理学 58, 2006, 140-145 頁。(2)梶田 真「戦後の縁辺地域における土木業者の発展過程と労使関係の性格ー奥地山村を事例としてー」地理科学 60, 2005, 237-259 頁。
- xv 吉田国光「山村における棚田維持の背景ー長野県中条村大西地区を事例としてー」人文地理 63, 2011, 149-164 頁。
- xvi 前掲 7